

れば、同じ敦煌出土の五代及び宋代の文書に見えるものとは大に風格を異にし、また同所より出た多くの佛典に用ひらるゝ文字とも、自から趣を異にするが、然も同じ景典なる一神論の文字とはすべての點に於て酷似するものがあり、共に必ず中唐時代以前の書寫なるに相違無いと思はれる。此の點について注意しなければならぬことは、殘經 162 行に、則天文字の「思」すなはち「臣」と認めらるゝ字の存することであるが、然も、此の字を形通りに臣と讀むと、後に述べる如く、其の一節の意味を解することが出来ないのみならず、この以外には一つとして則天文字の用ひられてゐないことから考へても、多分これは「惡」字の誤寫であらうと思ふ。萬一之を臣と讀むべきだとすれば、即ち則天文字であるとするならば、この經書寫の時代に於て一道の光明を附與するものであるが、かく見るにしても、矢張り中唐以前の書寫と見るべき事に於て動きは無い。自分は別に論ずる如く、一神論を以て景教が唐に傳へられた貞觀九年を距ること僅に六年なる貞觀十五年頃に、唐に於て撰述せられたものと考へるのであるが、之と性質上同様に景教の教理論に屬するもので、其の文體に於ても書寫の文字に於ても酷似した此の序聽迷詩所經も、矢張り略ぼ此の時代に撰述され、其の後遠からぬ時代に書寫されたもので無からうかと思ふ。まだ漢語漢文に通達しない外國人が譯述や論述の事業に従事する場合には、此の經典について認むるやうな奇怪な述作の行はれることは有りがちの事で、佛典の場合に於ても同様であつたと思ふ。かの貞元中般若三藏が景淨と共に胡本大乘理趣六波羅蜜經を譯出した時にも「爲般若不閑胡語、復未解唐言、景淨不識梵文、復未明解釋教、雖稱傳譯、未獲半球」と記されてゐる如きは、同様の場合の更に複雑なる形を取つたものに外ならぬ。若し景教傳來以後長い年月を経過し、その教義が可なり世間に知られたり尊信せられた後に於ける景土の事業であるとするならば、少くともかゝる